

空襲の歴史社会学

ー社会運動化のメカニズムと記録史ー

星 鉄雲

空襲はどのように語られ、記録されてきたのか。

空襲は戦後 25 年間語られずに来た。それは、「ありふれた」、「普遍的」な戦争体験であったからであるといえる。一方で、戦場体験や沖縄戦、広島・長崎の原爆による被爆は、早くから語られ、記録されてきた。沖縄のような基地の「危険性」や原爆の第五福竜丸事件の放射能のように切迫した問題を抱えておらず、空襲は体験を代表する事件や語られる磁場といった空間が一定ではなかった。しかし、空襲は語られるまでの 25 年という時差が他の戦争体験にはない「特殊性」といえ、記録運動へと結びついていったのである。

本研究では、1970 年に活動し始めた空襲記録運動を通時的に検証し、空襲がどのように語られ、記録されていくのかとともに、社会運動が成立するメカニズムを明らかにする。「空襲記録運動」は、内部から戦災補償・援護法立法化を求める社会運動が誕生したり、他にも遺跡や遺物といった記録の対象が変化したり、運動が展開していく過程を見ることで、多くの運動を社会運動たらしめる諸特性を考察する一助となることができる。

先行研究で指摘されていない新しい論点として、以下の 3 つを挙げた。まずは、空襲の体験・研究は、時間認識および空間認識が発災時に制約されているという課題の克服だ。たしかに、体験を語るさい、空襲研究で注目を集めるのは「空襲された日」である。しかし、空襲記録運動では、事実として記録する試みがされていたため、空襲全体を捉え、また地域ごとの空襲の連続性を明らかにしたことにより、発災時に限らず、空襲のつながりや地域ごとの差異を通時的に検証した。これまでは、戦時中の銃後の生活や「隣組」などによって、空襲認識の拡張が試みられてきた。しかし、空襲記録運動によって拡張される空襲は、体験・資料・研究といった 3 つの側面から形成されている。

続いて、本研究は空襲記録運動と「被害と加害」論争に着目した。60 年代後半に盛り上がりを見せた「被害と加害」論争は、1980 年代前半に空襲記録運動と結びついた。運動の時差もあれ

ば、議論されるまでの時差も存在した。しかし、空襲記録運動内では議論されるが、「空襲＝被害」の立場は揺るがなかった。被害の立場を知ること、加害を認識することができるという議論がされていた。これらの議論と結びついたのが「記録」であり、「被害と加害」論争が誕生したあとすぐに発足した空襲記録運動にとっては喫緊の課題ではなかったといえる。

そして、社会運動のメカニズムも見逃せない論点を提示している。社会運動が当然の如く、社会背景と結びつけられて運動がされ、「思想」と「運動」の相互の連環によって、社会運動と位置付けられてきた。しかし、「記録」があるからこそ、「思想」や具体的な「運動」につながるのであり、「記録」と「運動」のつながりについては、十分に研究されていない。空襲記録運動は、運動を開始して 7 年目にして、衰退の傾向があった。それは、「記録か実践かのジレンマ」といわれ、記録運動か社会運動のどちらを軸に運動を継続するかといった議論である。空襲記録運動内部から発足した「全国傷害者連絡協議会」は記録がされていくにつれて勢力を増していく一方で、記録運動から離れていった。被害が明確になるにつれて、記録と戦災補償の要求とでは、運動の目的が異なることから運動は細分化されていくのである。

分析の結果、空襲記録運動は社会運動にはなり得なかった。それは、空襲記録運動が社会運動の前史に当たる運動であるからである。つまり、「反戦」や「平和」などの「思想」や「運動」は、「記録」があることで呼び起こされるのである。「記録の無さ」から運動が始まった空襲においては、「反戦」・「平和」といった思想よりも「記録する」ことが重要であった。つまり、社会運動における「平和」や「反戦」などの思想や運動は、「記録」の上に成り立つのだ。思想から運動が生まれ、運動から思想が生まれるためには、その基礎・土台となる「記録」が必要であることを明らかにした。

とはいえ、本研究は課題を残した。他の社会運動との比較且つ広範な視座に基づく分析が求められる。本研究の分析対象は、空襲・記録運動・刊行された紙媒体と範囲が限定されており、その中での検証にとどまっている。研究が少ない空襲記録運動は、原水爆禁止運動や安保闘争などに比べて難しく、筆者の及ばぬ点が多々あった。

今後は、社会運動の諸特性を考察するために、空襲記録運動以外の社会運動の多角的な分析が不可欠である。